〈阿弥陀鼓音声陀羅尼経〉の研究

—阿弥陀仏信仰の密教への展開—

中御門　敬　教

はじめに

〈阿弥陀鼓音声陀羅尼経〉（以下〈鼓音声陀羅尼経〉）は極楽浄土を明かす経典として比較的よく知られている。その中心的な所説は西方極楽浄土に阿弥陀仏（無量寿仏）がおり，その仏の名号を正しく受持し，唱え，念じて，十日間一心不乱に行えば見仏でき，さらに臨終時にかの仏の来迎を受け極楽浄土の蓮華に化生できることである。当経は先行する顕教経典（〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈般舟三昧経〉）から多くの要素を承けており，阿弥陀仏信仰の展開としても重要である（注記に指摘する）。さらに阿弥陀仏が出家する以前には父母妻子，成仏以降には声聞の弟子衆があることも説かれている。この記述は応身（変化身）としての阿弥陀仏を強調する際に，後代の仏典において根拠とされることが多い。また本経では所説の「無死鼓音声王（Tib. *'Chi med rnga sgra'i rgyal po*）」という名の陀羅尼を唱えて阿弥陀仏を供養し作意すれば往生できると説くように，密教的な要素が登場している。本経は陀羅尼を通じて阿弥陀仏信仰に密教化の波が及んだ最初期の仏典でもある。

この陀羅尼の名は所説の陀羅尼の末尾にある「無死なる鼓の音声よ，スヴァーハ。（amṛtadundubhiḥ svare svāhā）」によるものである。ちなみに，成道後の釈迦がベナレスへ向かう途中に出会った，アージーヴィカ教徒ウパカに対する教言にもこの語句は含まれている。すなわち以下の通りである。

「われは一切にうち勝った者，一切を知る者である。一切のものごとに汚されていない。すべてを捨てて，妄執をなくしたから解脱している。みずから知ったならば，だれを［師と］めざすであろうか。われには師は存在しない。われに似た者は存在しない。神々を含めた世界のうちに，われに比敵し得る者は存在しない。われこそは世間において尊敬されるべき人である。われは無上の師である。われは唯一なる正等覚者である。われは清涼となり，やすらいに帰している。法

輪を転ぜんがために，わたくしはカーシー（＝ベナレス）の町に往く。妄闇の世界において不死の鼓をうたう（Pa. andhabhūtasmi lokasmiṃ ahañhi amatadudrabhinti)。」（中村元訳）[1]

この引用の特に下線部分は，仏法の真実性・永遠性を譬喩表現するものと言えよう。またこの語句は，後には〈阿弥陀経〉〈金光明経〉においても用いられる。〈阿弥陀経〉六方段（北方）では「最勝音仏（Skt. Dundbhi-svara-nirghoṣa)」として登場し，〈阿弥陀経〉六方段を受けた〈金光明経〉四方四仏（北方）にも「微妙音／天鼓音如来（Skt. Dundbhi-svara)」として現れるように[2]，後代には尊格にまで昇華する。純然たる密教の典籍，唐不空訳『無量寿如来観行供養儀軌』「無量寿如来根本陀羅尼」（cf. 大正 No. 930）においてもこの語句は見られる[3]。

そもそも「陀羅尼」という言葉は「聞持陀羅尼（Skt. śruta-grahaṇa-dhāraṇī)」という複合語を持つように，教法の受持に起源を持つ。また陀羅尼は仏を仏たらしめる，三世にわたる教法を相続する行為であり，同じく三世にまたがる三身，特に現在仏の色身の相好を心に刻む念仏と本質的に異ならず，念仏三昧，三昧における見仏とも関連が深いとされていている[4]。そのことは阿弥陀仏に関して念仏三昧，見仏，陀羅尼を説く本経にも妥当する。以上のことから，本経所説の陀羅尼の名称は，無仏の世において仏の存在を念じ，保つとともに，それが永遠の真実を轟かせつづける存在であることを示したもの，ということになるであろうか。

また当経の三法を随念する部分（通番号 B「仏は不可思議である。仏法も不可思議である。聖者のサンガは不可思議である。不可思議なものを浄信したならば，果報も不可思議である」）は，チベット仏教においてよく知られており，用いられるという[5]。この三宝不可思議を説く文句は，〈大乗涅槃経〉[6] には三宝の常住を説く個所に

---

1)　cf. 中村［1992］p. 470　この文章は *MN*. No. 26, *Apariyesanasutta*, *Vinaya*. *Mahāvagga* 等に出る。詳しくは *ibid*., p. 12. note 12 を参照のこと。

2)　cf. 田中［2004］pp. 24–26

3)　［梵文］阿弥陀（無量寿）如来根本陀羅尼（cf. 中村［1972］pp. 417–418　＊金岡秀友訳）「（仏・法・僧の）三宝に帰依したてまつる。聖き無量光の如来・供養に応しきもの・正しく等きさとりをえたるものに帰依したてまつる。すなわち，オーム，甘露よ，甘露を生み出すものよ，甘露の源なるものよ，甘露の胎よ，甘露を完成するものよ，甘露の威光よ，甘露の勇猛なるものよ，甘露の勇猛なることを行ずるものよ，甘露の虚空の（如く広き）作用をなすものよ，甘露の鼓のごとき音よ，すべての目的を達成するものよ，すべての行為と煩悩の消滅をなすものよ。スヴァーハ。(namo ratna-trayāya. namaḥ ārya(sic.)mitābhāya tathāgatāyārhate samyaksambuddhāya tad yathā oṃ amṛte amṛtodbhave amṛta-saṃbhave amṛta-garbhe amṛta-siddhe amṛta-teje amṛta-vikrānte amṛta-vikrānta-gāmine amṛta-gagana-kṛti-kare amṛta-duṃdhbi-svare sarvārtha-sādhane sarva-karma-kleśa-kṣayaṃ-kare, svāhā.)」
（金岡訳では「Skt. amṛta」は甘露と訳されている。）

4)　cf. 氏家［1987］pp. 3–68

出ている。阿弥陀仏や西方の極楽浄土の存在を説く〈鼓音声陀羅尼経〉は，直後に浄土への往生を述べているのに対して，如来の常住，一切衆生悉有仏性を説く〈大乗涅槃経〉は「この〈大乗涅槃経〉もまた不可思議」と述べている。漢訳の〈鼓音声陀羅尼経〉は三宝不可思議の訳出自体が不明確であるから除外するが，両経は文脈こそ異なるものの，いずれも釈迦示寂の後，仏の不在の時代にあって，仏法僧の確立ということに関心を寄せているように思われる。

また阿弥陀仏の両脇侍として観世音，大勢至の両菩薩が立つとされており，三尊形式を説く点についても当経は注目される。

経典自体はチベットでは密教経典の分類として，いわゆる四部タントラの内，所作タントラに分類されて，蓮華部の正尊を説くものとされる。所作タントラは中国・日本の分類では「雑密」に相当し，〈大日経〉〈初会金剛頂経〉などの高度な体系化を経る以前の密教経典である。本経所説の陀羅尼は，インドでは後に経典を離れて密教の阿弥陀仏または無量寿智仏の成就法類にも採用されており，それはチベットにも継承された[7]。すなわち，10 世紀から 11 世紀にインドで顕密に重要な著作を残したジターリ[8]の〈無量寿智儀軌〉には，修行の場に安置すべき「二つの無量寿経（*Tshe dpag med pa'i mdo gnyis*）」が言及される。その二つは，後にチベットでジターリの阿弥陀仏成就法に関する三つの著作を綜合したダツェパ[9]の著作『無量寿無死鼓音のマンダラ儀軌』によれば，〈鼓音声陀羅尼経〉と〈無量寿宗要経〉とされている[10]。この儀軌に〈鼓音声陀羅尼経〉は所説の陀羅尼を出すのみであるが，題名には陀羅尼本来の「無死鼓音」の名が明記されており，〈鼓音声陀羅尼経〉との関係は失われていなかったようである。

一方顕教において本経は，チベットでも中国でも，西方の極楽浄土，阿弥陀仏の存在を証す部分，称名により往生できる部分が，注目されている。特に中国では仏身仏

5）ツォンカパ著『菩提道次第大論』（*Lam rim chen mo*）にも引用されている。その引用は三宝の利徳を知って昼三回，夜三回帰依すべきことを説くうち，「『摂決択分』に出ている利徳」に出る箇所である。本来これは『瑜伽師地論摂決択分』にあったものではなく，インド，チベットの継承の中で，この三宝不可思議の文言が『摂決択分』の記述に相応しいので，そこに適用されたものと思われる（cf. ツルティム，藤仲［2005］pp. 205–206）。

6）cf. 注 19

7）注 21 から分かるように，本経は陀羅尼の存在のみを根拠としてチベットでは密教経典に分類されている。チベットの大学者プトン・リンチェンドゥプ著『秘密真言四タントラの諸陀羅尼を一つにまとめた十万大陀羅尼』（*Gsang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo*，cf. 東北 No. 5170–228）には，諸々のタントラから真言，陀羅尼が収集されているが，そこにもこの陀羅尼が収録されている。

8）白嵩［1981］pp. 4–7 は，ジターリの年代を 960–1040 とする。

9）年代は 1290–1364 であり，大学者プトンの法嗣として著名である。

10）cf. 藤仲，中御門［2004］

土論との絡みで，いわゆる釈迦成道説を参考にした応身の仏格を強調する点，さらに阿弥陀仏は婆羅門種であり，その国土には父母妻子，悪逆者がいるなどと穢土相を説く点がよく引用されている。同様に三論宗の浄彰寺慧遠（523–592）は『無量寿経義疏』『観無量寿経義疏』において『観音授記経』を典拠とする阿弥陀仏般涅槃説をもとに，阿弥陀仏の仏格を応身と主張する。また地論宗の嘉祥寺吉蔵（549–623）は『観無量寿経疏』においても前者と同じく阿弥陀仏を応身とする。何れも三身をたてた上でどの仏格を妥当とするかの立場から応身が強調される。こうした阿弥陀仏応身説の趨勢に対して反論を加えた人物が道綽（562–645）であり，彼の立場は後続する善導らの浄土教に大きな影響を与えた。彼の主著『安楽集』「第一大門第七，三身三土義」では浄彰寺慧遠らがたてた極楽の主を応身，極楽浄土を応土とする説に対して反論を加え極楽の主を報身，極楽浄土を報土とした。この論述の中で〈鼓音声陀羅尼経〉所説の穢土相（cf. 本稿通番号 C）が引用され，それをもって応身の阿弥陀仏の根拠された[11]。ただしこれは阿弥陀仏の持つ一面であり，道綽によるとその仏格の中心は先に述べた通りあくまで報身である。また，宋孤山智円（976–1022）の『仏説阿弥陀経疏』（cf. 大正 No. 1760）には本経によって，阿弥陀は浄土相だけではなく穢土相を現し，釈迦も穢土相だけでなく浄土相を現していることから，仏の応身には二重の側面が有ると説く。そして衆生の機は等しくないので，釈迦は折伏により，弥陀は摂受によって成熟させるが，菩提に至らせるのは同じであるとしている。これを承けて南宋宗曉（1151–1214）の『楽邦文類』（cf. 大正 No. 1969）には降誕する時には母など女人がいても，正覚した時には浄土になるとして，「女人根欠は生ぜず」とするインドの説を正しいとしている。その他，本経は明大佑『浄土指帰』，明袁宏道『西方合論』などにも浄土教典籍として挙げられている。

また日本の，例えば『往生要集』では，本経は種々の特徴を捉えて言及しながら，往生の諸行を明かす諸経・呪の一つに挙げられている[12]。『選択本願念仏集』「第十四章　六方諸仏唯証誠念仏篇」にも智顗『浄土十疑論』からの孫引きの形で，この経を念仏往生についての諸仏証誠の一例とする箇所が引用される。しかし教判としては傍らに往生浄土を明かす教えの一つとし，持経と持呪の「読誦大乗の行」のうち持呪の箇所に言及するだけである。さらに長西『浄土依憑経論章疏目録』「羣経録第一」，文雄『蓮門経籍録』「傍依経本類」，継成『阿弥陀仏説林』，矢吹慶輝『傍説浄土教論集』などに浄土教典籍として挙げられている。また台密事相を広く集大成した『阿娑縛

11）cf.『安楽集』（『浄土宗全書』1，pp. 676–677），p. 286 坪井［1980］pp. 298–305，髙橋［1980］，内藤［2002］pp. 59–69

抄』第五十三の阿弥陀の項目にも当経は挙げられる[13]。注釈書には新義真言宗の俊彦亮汰（1622–1680）による『阿弥陀鼓音声経鈔』が存在すると言われるが，これを参照することは叶わなかった[14]。

次に梵本，蔵訳，漢訳について補足説明を若干行いたい。先ず梵文については現時点では報告されていない。ただし，H. Takaoka, *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal*, Vol. 1, Nagoya, 1981, CH539に基づき，塚本，松永，磯田［1989］（p. 123）は「Aparimitāhṛdaya」を挙げており，この点については今後調査が必要である。

チベットにおける当経の扱いについては小野田［1987］，拙稿［2004］（藤仲氏との共著）等を御覧頂きたい。他方，現存の漢訳『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』[15]は失訳とされており，梁代に失訳陀羅尼経類を集成したと思われる『陀羅尼雑集』巻四（cf. 大正 No. 1336）にも収録されている。訳者については経典冒頭に「失訳人名今附梁

12）源信『往生要集』（『浄土宗全書』15, pp. 64–65）には，十方に浄土がある中で，西方極楽浄土に往生することを願う根拠の一つとして当経が挙げられる。すなわち以下の通りである。

「大文第三明極楽證拠者有二。一対十方，二対兜卒。（中略）迦才師三巻浄土論引十二経七論※1。一無量寿経，二観経，三小阿弥陀経，四鼓音声経，五称揚諸仏功徳経，六発覚浄心経，七大集経，八十往生経，九薬師経，十般舟三昧経，十一大阿弥陀経，十二無量清浄平等覚経。〈已上。双観無量寿経，清浄覚経，大阿弥陀経，同本異訳也〉一往生論，二起信論，三十住毘婆沙論，四一切経中弥陀偈，五宝性論，六龍樹十二礼，七摂大乗論弥陀偈。〈已上。智憬師※2同之〉」

なお長西『浄土依憑経論章疏目録』に先行する現存最古の浄土教典籍目録，『阿弥陀仏経論並章疏目録』（成立下限11世紀前半）にも当経は挙げられている。本目録の撰述者としては源信の弟子寛印とも目されており，天台浄土教における当経の位置が理解できる（cf. 阿部，山崎編［2005］※執筆者は落合俊典氏）

※1. 唐迦才撰『浄土論』（大正 No. 1963, p. 91）が直接の出典箇所である。なお *ibid.*, p 93a-b では「第四鼓音声王経云～」ではじまる経典の趣意が紹介され，末尾は「釈曰。依此経十日念仏即見阿弥陀仏。不論命寿時也」と締めくくられる。つまり臨終見仏のみならず平生見仏の根拠に当経を挙げる。この段のみならず *ibid.*, p. 88c においても十日十夜の不断念仏を挙げた後で，割注において「此是鼓音声経。此明現在未死時，則得見仏也」と平生見仏を説く。当経は迦才『浄土論』で計六回引用される。これは当経が「正しく本論所依の経論」たる根拠となるものである（cf. 名畑［1955］巻末「引用経論一覧」）。

※2. 石田［1970］p. 78には「智璟とも書く。奈良時代末期の人。その著書に起信論同異章一巻や，元暁の両巻観無量寿経宗要の釈があったという。あるいは別人とも考えられる」とある。

13）cf. 仏書刊行会編［1912］p. 825

14）cf. 小野，丸山編［1999］p. 55

【俊彦亮汰】（cf.『日本仏教人名辞典』，法蔵館，1992年，p. 828）

「江戸前期の新義真言宗の僧，長谷寺11世。元和8（1622）～延宝8（1680）11. 10　諱．亮汰　字．俊彦，浄泉　生．薩摩田布施高橋（鹿児島）　師．亮典，亮雄，尊慶　事．9歳で出家，18歳で上京して諸方を巡歴し，興法寺に住した。のち上乗院の亮雄から金剛王院流を受伝，1648年長谷寺の尊慶に学び，57年喜多坊に住した。ついで近江総持寺，京都の般若寺，仁和寺花厳院を経て，80年幕命で長谷寺能化，僧正となる。根本経典の通意的解釈に秀でた。著．理趣経純秘鈔3巻，科註住心論3巻，口疏科註6巻，起信論講議4巻など多数　史．豊山伝記中，続日本高僧伝11，参．富田学純・新義真言宗史　掲．密」

録」とある[16]。『国訳一切経』「宝積部７」（大東出版社，1932年，p. 271）には訳者蓮沢成淳氏によって当経訳出状況が簡単に触れられている[17]。また従来この経には中国撰述説がある。『浄土宗大辞典』の「阿弥陀鼓音声王陀羅尼経」の項目には，「隋の『法経録』一に単本失訳として記録しているのが経録上の初見。おそらくは六朝末期の疑経」[18] とある。しかし，蔵訳の奥書だけでなく，本稿において示すように漢訳と比較検討するならば，固有名詞の違い，インド語を基にした翻訳の痕跡（cf. 注 36, 41），訳出の明瞭さから蔵訳は漢訳からの重訳ではなく，インド撰述であると考えられる。

成立年代について

以下の事柄，特に漢訳の年代を勘案すると５世紀以降，６世紀中頃以前の成立と推測される。

- 蔵訳はかなり後代の典籍であるため一先ずさしおき，漢訳は（cf. 注 16）梁代（507-557）に翻訳されている。
- 直接的な年代の根拠ではないが当経は〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈般舟三昧経〉，

15）この題名は蔵訳『聖なる無量寿智の心呪』（*'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po*）とは大幅に異なるため，蔵訳をもとにここの音写語「阿弥陀」の原語を確認することは困難である。しかし蔵訳所説の陀羅尼名「無死鼓音声王（*'Chi med rnga sgra'i rgyal po*）」からは，漢訳題名の「阿弥陀［仏］の鼓音声～」ではなく，「無死の鼓音声～」となる。つまりは漢訳者は「Skt. amṛta（無死／甘露）」を「阿弥陀」と音写したことになる。しかし「Skt. amita（無量）」を「阿弥陀」と音写した可能性も残されている。蔵訳デルゲ版所説の陀羅尼内で「a m ṛ ta（無死／甘露）」と音写される箇所が，同じく北京版では「a mi ta（無量）」と音写される（cf. E 段）。藤田［1970］p. 290 には，ピッシェルやガイガーの指摘に基づき梵語の ṛ が i になることを指摘しつつも，それが amṛta について適用される用例は未報告と述べられている。しかしこの陀羅尼の用例からは amita と amṛta の交代はあったようである。そしてその原因は陀羅尼の性格（読誦）からして音声の類似によるものと思われる。ちなみに，漢訳者は対応する「amṛta / amita」の箇所を「阿弥多」と音写し，漢訳題名の「阿弥陀」と区別しているので，漢訳題名は経典の内容から阿弥陀仏の名を採用した可能性も考えられる。

　このように漢訳題名（阿弥陀）の原語問題について確定は困難であるが，内容面からは無量の鼓音ではなく，仏法の永続性をうたう無死の鼓音がふさわしいように思われる。

16）ここの『大正蔵』における注記は以下の通りである。
「失訳人名今附梁録＝失訳【宋】【宮】，開元附梁録失訳人名【元】，失訳人名開元附梁録【明】，欠【福】」

17）「本経は，隋の法経の録に，阿弥陀鼓音声王陀羅尼経一巻，単本失訳として出して以来，諸録は失訳とし，開元録第十二には「失訳，捨遺編入，今附梁録」と註し，貞元録第九の，新集失訳諸経の項には，この経をはじめ，十四部を出し，「其の文句に尋むるに，是れ遠代のものに非ず，故に梁末に編して，以て梁代失源と為す」とことわっている。是れ等に依ると，この経は梁代（507–557）に訳されたものといふことになる。～」

18）cf.『浄土宗大辞典』１，山喜房仏書林，1974年，p. 28

特に〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉の内容をよく踏まえている。しかし，〈大日経〉以降の高度に体系化された密教を知らない。

・初期仏教においては仏の入滅・不在を嘆き，天の鼓（Pa. deva-dundbhi）が響いたという（cf.〈小乗涅槃経〉）。後の大乗仏教では初期の衝撃的な例えが一転して，仏法の永遠性を示す比喩として主に用いられる。その具体例が〈智光明荘厳経〉や本経であり，それと基調を等しくするものが〈大乗涅槃経〉である。また両者を結びつける特徴となるものが，三宝不可思議の文句である。〈大乗涅槃経〉[19] の成立年代は漢訳の年代から見て4世紀とされている。なお同経は基本的に経典の核として仏身常住思想のみを説くより古い部分と，如来蔵思想を説くより新しい部分からなるといわれている。さらに仏の常住を説く部分より，三宝の常住を説く部分は遅れて成立したとされている[20]。

・往生浄土と主題となる阿弥陀仏信仰を基調にしつつ，それを陀羅尼によって包摂したことにより，後の密教的展開に道を開いた初期の経典といえる。

ちなみに陀羅尼を扱う経典は以前の時代には，例えば悲華経陀羅尼品，妙法蓮華経陀羅尼品などの顕教経典の一部に特定の役割を果すものが多い。それ以後の展開としては大集部諸経が挙げられる。同部の特徴として顕教の経典でありながら，陀羅尼が大きな位置を占めている。この大集部経典を数多く（大正 No. 397-1～11，13）翻訳した者に，北涼曇無讖（385-433）がいる。また彼は先に問題とした三宝不可思議の文が多く説かれる〈大乗涅槃経〉の訳者であり，〈金光明経〉のような密教の組織化が始まった経典をも翻訳している。本経は曇無讖に代表されるように，大集部や涅槃部の経典が続々と翻訳され，このような顕教の大乗経典が徐々に密教化しはじめた時代の産物である。後の唐代になると，純粋な密教経典としての「陀羅尼経」が次々と漢訳されるのである。

19）一例として蔵訳〈大乗涅槃経〉第7章「名字功徳品」には以下のように出る。

「[カーシャパ] 申し上げて，「噫，世尊よ。如来は不可思議でございます。説かれた法は不可思議であります。さまざまの功徳を具えたサンガは不可思議であります。同様にこの『大乗涅槃経』も不可思議であります。ここにおいて，お言葉の如くに実行する者たちは，正しく理解する衆生であります。彼らはチャイトヤの如き存在であります。他の者は苦しんでおり，無明のアーラヌヤ処にいる者であります。」（cf. 下田［1993］p. 292，cf. *'Phags pa yongs su mya ngan las 'das pa chen po theg pa chen po'i mdo*［デルゲ版］東北 No. 120, Tha. 52a4，［北京版］大谷 No. 788, Tu. 52b3–4）。

対応する漢訳は以下の通りである。

東晋法顕訳『仏説大般泥洹経』「迦葉菩薩白仏言。甚奇世尊。如来法身不可思議。所説妙法不可思議。衆僧功徳不可思議。此経不可思議。」（大正 No. 376, p. 868a13–14），北涼曇無讖訳『大般涅槃経』「迦葉菩薩復白仏言。甚奇世尊。如来功徳不可思議。法僧亦爾不可思議。是大涅槃亦不可思議。」（大正 No. 374, p. 385b2–3）

20）cf. 勝崎，小峰，下田，渡辺［1997］pp. 197–200，下田［1997］pp. 202–204

訳注にあたって

当経には蔵訳と漢訳が存在する。蔵訳はデルゲ版を底本とし，必要に応じて北京版を参照した[21]。漢訳は失訳『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』（大正 No. 370）を底本とした。これは『陀羅尼雑集』巻第四「阿弥陀鼓音声王陀羅尼」（大正 No. 1336）として『大正蔵』に採録されてもいる。本来ならば上記以外の各諸版をも参照し校定テキストを作成し訳注を行うべきであろう。しかし本稿においては現代語訳が公表されていない本経の状況を鑑み，先ずは諸訳の内容紹介を中心課題とした。またその際には経典を細かく分け（A～I），蔵訳と漢訳を対照できる形式を取った。ただし漢訳は四言を一句とした句づくりを主に行っていて，格の訳出は曖昧になっており，蔵訳と対照させた場合に増減があること，したがって厳密な意味での対比は困難であることをお断りしておきたい。

注記の付け方としては蔵訳と漢訳の双方にまたがる内容が多いため，混乱をさけるため原則として蔵訳を中心に注記を行った。その際には先行する〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈般舟三昧経〉の対応箇所を下線を引いて提示し，さらに漢訳を中心とした後代への影響を指摘した。

最後に，訳注にあたっての我々の誤りを御指摘して頂ければ幸いであります。

蔵漢和訳注　阿弥陀鼓音声王陀羅尼経

A.　東北 No. 676, Ba. 220b5–221a1，大谷 No. 363, Ba. 254a2–5

インド語で *Ā rya a pa ri mi ta ā yur dznyā na hrī da ya nā ma dhā ra ṇī*（聖なる無量寿智の心呪という名の陀羅尼），チベット語で *'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs*（同上）。一切の仏菩薩に敬礼する。

このように私は聞いた。ある時，世尊はガンジス河［にせまる］チャンパー（Skt. Campā, Tib. Ta sa）の伽伽池（Skt. Gargarā-puṣkariṇī, Tib. bsKor ba'i rdzing bu）の岸辺に，五百の比丘［からなる］比丘の大サンガと，菩薩の大サンガと一会に住しておられた。さて世尊は諸比丘に宣べられた。彼ら比丘たちは世尊に応答して，世尊は彼らにこのように宣べられた。

21）［蔵訳］*Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs*［デルゲ版］東北 No. 676, rGyud 'bum を中心に使用し，［北京版］大谷 No. 363, rGyud と［デルゲ版］東北 No. 850–5, gZungs 'dus も参照した。

A. 大正 No. 370, p. 352b8–12

阿弥陀鼓音声王陀羅尼経　失訳人名今附梁録

このように私は聞いた。ある時仏はチャンパー国の伽伽霊池に五百人の比丘［からなる］大サンガと共におられた。そのとき世尊は出家者たちに告げた。

「今お前たちに教えをとこう。」

B[22]. 東北 No. 676, Ba. 221a1–4, 大谷 No. 363, Ba. 254a5–b1

「ここから西方に極楽世界がある。そこには正等覚者が居られる。無量寿如来（漢訳，阿弥陀）である[23]。(I)

誰でも彼の名号を唱えるなら，彼はそこに生まれるであろう。［彼の］臨終時には，教主が比丘のサンガとともに，見える「であろう］[24]。(II)

そこに女性が存在することはない[25]。胎［からの］生は存在しない[26]。

諸々の宝の蓮華から大神力が生ずるであろう[27]。(III)

食と衣と薬と，法衣，臥具，鉢を心で思うやいなや，それらがすぐに生ずるであろう[28]。(IV)

十方に住しておられる諸仏は，極楽の讃嘆を唱えた[29]。そのように仏は不可思議である。仏法[30]も不可思議である。(V)

聖者のサンガは不可思議である。不可思議なものを浄信したならば，果報も不可思議である[31]。浄らかな国土に生まれるであろう。(VI)

---

22) このB段は，ゲルク派のチャンキャ1世ガクワン・ロサン・チュウデン・ペルサンポ（Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po, 1642–1715）著『『最上国開門』の所縁次第要略』(*Zhing mchog sgo 'byed kyi dmigs rim mdor bsdus*）の冒頭に引用されている。またB段のI, IIは，無宗派運動のジュ・ミーパム・ギャムツォ（'Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho, 1846–1912）著『極楽国土を浄める信を明かすもの　—仙人の教えの太陽—』(*bDe ba can gyi zhing sbyong ba'i dad pa gsal bar byed pa—Drang srong lung gi nyi ma—*）に引用されている（和訳 cf. 梶濱［2002］pp. 437–438, 536–537)。

23) 〈無量寿経〉の対応箇所は以下の通りである。ただし梵本と蔵訳は無量光仏を出す。
［梵本］Ashikaga [1965] p. 26, l.15, ［蔵訳］『浄土宗全書』23, p. 262, ［漢訳］伝呉支謙訳『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』（大正 No. 362, p. 303b)，伝後漢支婁迦讖訳『仏説無量清浄平等覚経』（大正 No. 361, p. 282c)，伝曹魏康僧鎧訳『仏説無量寿経』（大正 No. 360, p. 270a)，唐菩提流支訳『大宝積経』「無量寿如来会」（大正 No. 310–5, p. 95c)，法賢訳『仏説大乗無量寿荘厳経』（大正 No. 363, p. 321c)
〈般舟三昧経〉の対応箇所は以下の通りである。蔵訳は無量寿仏，漢訳は全て阿弥陀仏を出す。梵本は未発見である。
［蔵訳］Paul M. Harrison [1978] p. 26, ［漢訳］後漢月氏三蔵支婁迦讖訳『般舟三昧経』（大正 No. 418, p. 905a)，後漢月氏三蔵支婁迦讖訳『仏説般舟三昧経』（大正 No. 417, p. 899a)，失訳『抜陂菩薩経』（大正 No. 419, p. 922a)，隋天竺三蔵闍那崛多訳『大方等大集経賢護分』（大正 No. 416, p. 875b–c)

24）漢訳対応箇所は「西方の極楽世界に現在仏がおられて阿弥陀という名前である。四衆がいて，かの仏の名前をよく受持すると，この功徳によって［命が］尽きようとする時，阿弥陀［仏］はそこで大勢の者たちとこの人のもとに来て，その［姿］を示す（若有四衆能正受持彼仏名号，以此功徳臨欲終時阿弥陀即与大衆往此人所令其得見）」である。後続する「D 段（D. 221b1）比丘たちよ，一切衆生は良く思念して，無量寿如来の名号を良く受持して，～」と関係する。ただし後者のほうがより詳しい説明であるので，〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈般舟三昧経〉との対応関係は注 37 にまわす。さてこの箇所においては，称名念仏を往生因に挙げる点が特徴的である。称名を往生因とするインド撰述の仏典は，意外なほど少ない。先行する〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉にも，往生因としての称名（口称）念仏は説かれない。これに対して中国浄土教の祖師たちが，特に称名（口称）念仏の根拠を『観無量寿経』（下品下生段）に求め，教証としての『無量寿経』第 18 願に「称我名号」の一句を加え，教義を明確化させたことが指摘されている（cf. 香川［1993］pp. 235–261））。例えば〈無量寿経〉漢訳で「念」と訳される箇所（＊1）を梵本で確認すると―「どんな衆生たちであってもかの如来を何度も姿の点から思念し（Skt. manasīkariṣyanti, Tib. yid la byed pa）」（Ashikaga [1965] p. 42, l.9）とある。ここの manasi-√kṛ は「作意」であって，口称の意味はない。ちなみにこの箇所に対応する梵本と蔵訳の本願文でも同様である。梵本には「彼らが澄浄な心によって私を随念するとして（Skt. anusmareyus, Tib. rje su dran pa）」（18 願 Ashikaga [1965] p. 13, l.22）とある。ここの anu-√smṛ からも同じく口称の意味は現れない。〈阿弥陀経〉梵本は「彼はかの世尊無量寿如来の名号を聞き，聞き終わって思念し（Skt. manasikariṣyati, Tib. yid la byed cing）～」（藤田［2001］p. 83, l.1）とありまた同じく口称念仏を説かない。漢訳の姚秦鳩摩羅什訳『仏説阿弥陀経』（大正 No. 366, p. 347b），唐玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』（大正 No. 367, p. 350a）ではそれぞれ「執持名号」「繫念不乱」と訳される。

＊1. 伝支謙訳には「至誠願欲往生阿弥陀仏国，常念至心不断絶者～」，伝支婁迦讖訳には「至精願欲生無量清浄仏国，当念至心不断絶者～」，伝康僧鎧訳には「一向専念無量寿仏～」，菩提流支訳には「専念無量寿仏～」，法賢訳には「聞此経典受持読誦書写供養～」とある。

25）〈無量寿経〉の対応箇所は以下の通りである。

［梵本］35 願 Ashikaga [1965] p. 18, l.9，［蔵訳］36 願『浄土宗全書』23，p. 248

［漢訳］伝支謙訳 2 願（大正 No. 362, p. 301a），伝康僧鎧訳 35 願（大正 No. 360, p. 268c），菩提流支訳 35 願（大正 No. 310–5, p. 94b），法賢訳 27 願（大正 No. 363, p. 320b）

26）漢訳対応箇所は「永久に胎と汚れた欲の姿を離れる（永離胞胎，穢欲之形）」である。ここでは化生往生を説くが，例えば迦才は阿弥陀仏に肉親がいることから，化土往生する人の一方を胎生とする。詳しくは注 12 を参照のこと。〈無量寿経〉の対応箇所は以下の通りである。

［梵本］Ashikaga [1965] p. 57, l.22，［蔵訳］36 願『浄土宗全書』23，p. 310

［漢訳］伝康僧鎧訳（大正 No. 360, p. 278a–b），菩提流支訳（大正 No. 310–5, p. 100a–b），法賢訳（大正 No. 363, p. 325b）

27）漢訳対応箇所は「もっぱら浄らかな宝でできた蓮華の中に自ずと化生する。大神通を具えている（純処鮮妙，宝蓮花中，自然化生，具大神通）」である。d 句は内容からして，むしろ「大神力により生ずるであろう」と具格で読みたいが，蔵訳は「rdzu phrul chen po 'byung bar 'gyur」であり，確認できない。

〈無量寿経〉の対応箇所は以下の通りである。

［梵本］Ashikaga [1965] p. 32, l.4，［蔵訳］36 願『浄土宗全書』23，p. 274

［漢訳］伝康僧鎧訳（大正 No. 360, p. 272a-b），菩提流支訳 35 願（大正 No. 310–5, p. 97c）

28）漢訳対応箇所は「もっぱら清らかな宝でできた蓮華の中に自ずと化生する。大神通を具えている（純処鮮妙，宝蓮花中，自然化生，具大神通）」である。〈無量寿経〉の対応箇所は以下の通りである。

［梵本］25 願 Ashikaga [1965] p. 15, l.22，［蔵訳］25 願『浄土宗全書』23，p. 244

［漢訳］法賢訳 20 願（大正 No. 363, p. 320a）

明確な対応箇所は上記であるが，諸本を通じてその趣意は多くの箇所において説かれる。

B. 大正 No. 370, p. 352b12–21

「西方の極楽世界に現在仏がおられて阿弥陀という名前である。四衆がいてよくかの仏の名前を受持すると，この功徳によって［命が］尽きようとする時，阿弥陀［仏］はそこで大勢の者たちとこの人のもとに来て，その［姿］を示す。［その者は］見終わって，たちまち喜びを生じ，ますます功徳を増やす。こうした理由で［将来］生まれる場所においては永久に胎と貪染の姿を離れる。もっぱら浄らかな宝でできた蓮華の中に自ずと化生する。大神通を具え，光明は光り輝いている。そのとき十方のガンジス河の砂の数もの諸仏誰もがともにかの極楽世界を讃嘆した。あらゆる仏の［具えている］法は不可思議である。神通によって変化身を現わすこと，数々の変化身を現わし数々の方便［を現わすこと］は不可思議である。こうしたことを良く信じたなら，その人は不可思議であり，得る業報もまた不可思議であると知るべきである。」

C. 東北 No. 676, Ba. 221a4–b1，大谷 No. 363, Ba. 254b1–6

比丘たちよ，如来，応供，正等覚である無量寿の，周囲を囲まれた宮殿といわれる，広さが一万ヨージャナあるものがあった。［彼は］王族として生まれた。比丘た

---

29) 訳対応箇所は「そのとき十方のガンジス河の砂の数もの諸仏誰もがともにかの極楽世界を讃嘆した（爾時十方，恒沙諸仏，皆共讃彼安楽世界）」である。〈無量寿経〉の対応箇所は以下の通りである。
［梵本］Ashikaga [1965] p. 41, l.25，［蔵訳］『浄土宗全書』23，p. 286，［漢訳］伝康僧鎧訳（大正 No. 360, p. 272b），菩提流支訳（大正 No. 310-5, p. 97c），法賢訳（大正 No. 363, p. 323a–b）
あるいは〈阿弥陀経〉で説かれる六方段（梵本，蔵訳，鳩摩羅什訳）ないし十方段（玄奘訳）を踏まえたものかもしれない。法然『選択本願念仏集』「第十四章六方諸仏唯証誠念仏篇」にも智顗『浄土十疑論』からの孫引きの形で経典名が引用されるが，その根拠はここの「爾時十方恒沙諸仏。皆共讃彼安楽世界」である。

30) 法は，教法と証得法とに二分される（cf.〈倶舎論〉VIII 38）。ここの「法」は証得法のうち，十八不具仏法などの「仏の具えている特性」と理解される可能性がある。

31) 注 19 の（大乗涅槃経）の場合と同じく，三宝不可思議を述べた後で，意図するテーマ（X）の不可思議を賛嘆する定例表現かもしれない（仏不可思議，法不可思議，僧不可思議，X 不可思議）。漢訳対応箇所は「あらゆる仏の［具えている］特性（法）は不可思議である。神通によって変化身を現わすこと，数々の変化身を現わし数々の方便［を現わすこと］は不可思議である。こうしたことを良く信じたなら，その人は不可思議であり，得る業報もまた不可思議であると知るべきである（所有仏法，不可思議。神通現化，種種方便，不可思議。若有能信，如是之事。当知是人，不可思議，所得業報，亦不可思議）」である。ここでは三宝中の仏法の区別が明確でないうえに，僧への言及が見られない。漢訳の〈鼓音声陀羅尼経〉が僧に言及しないことは，下田［1997］pp. 202–205 に〈大乗涅槃経〉において三宝の常住が説かれるうち，僧に関する記述は成立が遅くて，菩薩のサンガ形成を背景とするのではないかと推測されていることと，符合するように思われる。ちなみに仏不可思議，法不可思議を説くものに同じ涅槃部に分類される〈大悲経〉がある。出典は以下の通りである。
〔蔵訳〕*'Phags pa snying rje chen po'i pad ma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*〔デルゲ版〕東北 No. 111，Cha. 92a5〔北京版〕大谷 No. 779，Cu. 105b3-4，〔漢訳〕高齊那連提耶舎訳『大悲経』（大正 No. 380，p. 961b）

ちよ，如来，応供，正等覚である無量寿の父は，転輪王の最上賢といわれる者であった。彼の母は具光栄といわれる者であった。彼の妻はクシャトリアの賢護といわれる者であった。比丘たちよ，如来，応供，正等覚である無量寿の息子は，月光といわれる者である。侍者は無垢称といわれる者である。比丘たちよ，無量寿如来の，智慧を有する者の中で第一［の弟子］となった者は，賢頂といわれる者である。神力を有する者の中で第一，大精進を有する者の中で第一の者は，大荘厳といわれる者である。比丘たちよ，無量寿如来の魔は供養王といわれる者である。提婆達多の名前は清澄といわれるものである。比丘たちよ，無量寿如来の声聞の大衆は，六万の大声聞である[32]。

32）この段は多く完了時制が用いられているが，西方極楽浄土や阿弥陀仏の存在を説く本経の基本主張に配慮して，無量寿如来の出生や出家前の家族に関する部分は過去の事柄として完了時制，そして西方浄土における無量寿仏やその弟子たちの存在は現在の事柄として現在時制により翻訳した。また阿弥陀仏の出生，弟子など釈迦牟尼の場合を連想させる記述が見られるので，対比させておいた。

蔵漢対照

	蔵訳	漢訳
国	×	清泰
宮殿	'khor dang bcas pa	×
宮殿の広さ	一万ヨージャナ	十千由旬
生まれ	王族	刹利之種
父	'Khor los sgyur ba'i rgyal po bZang po'i mchog	月上転輪聖王
母	gZi brjid can	殊勝妙顔
妻	rGyal rigs bZang skyong ma	×
息子	Zla ba'i 'od	月明
［奉事］弟子（阿難）	sNyan pa dri ma med	無垢称
智慧弟子（舎利弗）	bZang po'i tog	賢光
神力精進具足弟子（目蓮）	bKod pa chen po	大化
魔王	mChod pa 'i rgyal po	無勝
提婆達多	Dang ba	寂静
声聞大衆	六万	六万

上記所説の展開形として元普度編『廬山蓮宗宝鑑』（大正 No. 1973, p. 306b）がある。すなわち以下の通りである。

「阿弥陀仏因地　鼓音王経云。過去劫中有国名妙喜。王名憍尸迦。祖父清泰國王。父月上転輪王。母殊勝妙顔。生三子長曰月明。次曰憍尸迦。三曰帝衆。時有一仏出世。名曰世自在王。憍尸迦心発道意。棄捨国位投仏出家。号曰法蔵比丘。又大弥陀経云。法蔵比丘於世自在王仏所。発無上意。一切世間無能及者。時仏説二百一十億諸仏刹土応其心願。法蔵稽首礼仏。広説四十八願云（本経具載）若不爾者誓不成仏。是時大地震動。天雨妙華空中。同声讃言決定成仏」

ここでは，月上転輪王と殊勝妙顔の間に三子がおり，その中の次男が世自在王仏について出家し法蔵菩薩になったとする等，かなり異なった記述が見られる。

この段の漢訳対応箇所は「阿弥陀仏は声聞と共におられる。～（中略）～阿弥陀仏は偉大な六万人の比丘と共におられた（阿弥陀仏与声聞俱。如来応正遍知，其国号曰清泰。聖王所住。其城縦広，十千由旬。於中充満刹利之種。阿弥陀仏如来応正遍知父，名月上転輪聖王。其母名曰殊勝妙顔。子名月明。奉事弟子，名無垢称。智慧弟子名曰賢光。神足精勤名曰大化。爾時魔王名曰無勝。有提婆達多名曰寂静。阿弥陀仏与大比丘六万人俱）」である。

C. 大正 No. 370, p. 352b21-28

「阿弥陀仏は声聞と共におられる。如来，応供，正遍知［，阿弥陀仏］のその国は清泰という。聖王の住む場所である。その都市（都）は広さは十千ヨージャナである。［その］中はクシャトリヤが溢れている。阿弥陀仏，如来，応供，正遍知の父は月上転輪聖王という名前である。彼の母の名前は殊勝妙顔という。子供は月明という名前である。奉侍する弟子は無垢称という名前である。智慧［第一の］弟子の名前は賢光という。神力と精進［第一の弟子の］名前は大化という。そのときの魔王の名前は無勝という。提婆達多がおり名前は寂静という。阿弥陀仏は偉大な六万人の比丘と共におられた。[33]」

D. 東北 No. 676, Ba. 221b1–4, 大谷 No. 363, Ba. 254b6–255a3

比丘たちよ，一切衆生は良く思惟して，無量寿如来の名号を良く受持して[34]，十日にわたり仏を随念し，［さらに］意の中で散乱なく修習し，極楽世界に住しておられる無量寿如来を継続的に作意すべきである。この『吉祥無死鼓音声王』（*dPal 'chi med rnga sgra'i rgyal po*）という陀羅尼も常に唱えるべきである。昼三回，夜三回，［身体の］五支分［により，すなわち五体投地］により敬礼し，一切衆生が無量寿如来を思惟したならば，十日を過ぎた時に無量寿如来を見るであろう。十方に住しておられる仏世尊一切（thams cad kyang）を見るであろう[35]。善根一切（thams cad kyang）[36]を極楽世界に廻向したならば，その者が臨終のとき無量寿如来は面前におられるであろう。かの無量寿如来の仏国土に生まれるであろう[37]。

D. 大正 No. 370, p. 352b28-c11

「もしも［人がいたとして］かの仏の名号を受持し，その心を堅固にし，憶念し，忘れず，十日十夜にわたり［心の］散乱を除き捨て，精進して念仏三昧を修習し，かの如来は常に安楽世界におられると［正］知し，憶念を続け，断絶させてはいけない。この『鼓音声王大陀羅尼』を受持して読誦せよ。十日十夜にわたり六時（一日六回）に専ら［かの仏を］念じて，五体投地してかの仏に敬礼し，正念を堅固にし，散乱［する心］を残らず取り除きなさい。もしも心を瞬間ごとに絶えさせなければ，十日の内に必ず阿弥陀仏を見ることができる。並びに十方世界の如来，およびその住所を見る。ただし重障と鈍根の人を除く。今ほんのわずかな時でさえ見ることができなければ，一切の諸善をすべて廻向し，安楽世界に往生できるよう願いなさい。臨終の日に阿弥陀仏と諸大衆はその人の前に現れ，安んじ慰め，善を誉めたたえる。この人

33)　この阿弥陀仏の穢土相は先に触れた『安楽集』，あるいはその流れを承けた唐懐感撰『釈浄土群疑論』（大正 No. 1960, pp. 63c–64b、cf. 金子［2000］）以外にも中国ではよく引用されており，特に関心が寄せられている。用例は以下の通りである。
・唐窺基撰『妙法蓮華経玄賛』（大正 No. 1723, p. 691a–b）
「如鼓音王経阿弥陀仏有妻子故」
・同上（大正 No. 1723, p. 791b）
「他受用身有母等。鼓音王経説。阿弥陀仏父名月上。母殊勝妙顔有子有魔等。」
・宋智円述『仏説阿弥陀経疏』（大正 No. 1760, p. 351c）
「鼓音王経。阿弥陀仏婆羅門種。母名殊勝妙顔。亦有悪逆弟子名為調達。既有女人及悪逆者。豈弥陀現穢耶。故知二仏生身皆為両重。若浄穢随縁不同。問釈迦既自能現浄土。何不勧衆生発願生彼而度令往弥陀国耶。答物機不等。為化亦殊。若唯於一仏有縁則始終自化。若於二仏有縁則彼此共化。是故釈迦現穢土而折伏。弥陀現浄土而摂受。」
・唐窺基撰『説無垢称経疏』（大正 No. 1782, p. 1030a）
「鼓音王経云。阿弥陀仏。父名月上。母名殊勝妙顔。有子有魔。亦有調達。」
・唐法崇述『仏頂尊勝陀羅尼経教跡義記』（大正 No. 1803, pp. 1038c–1039a）
「今者但有衆生。得聞此呪即得往生極楽世界。然弥陀仏国有其二種。一為地前凡夫二乗人現変化浄土。二為地上菩薩現他受用報身浄土。此二種涅槃之後皆補処也。鼓音王経云。阿弥陀仏国寿命無量八十億劫当入涅槃。正法滅後過中夜分明相出時。有観音菩薩。於七宝菩提樹下結跏趺坐成等正覚。号曰普光功徳山王如来。十号具足。国土如上。鼓音経云。阿弥陀仏有無量声聞。国名清泰。縦広十千由旬。父是輪王名月上。母名殊勝妙厳。魔王名無勝。提婆達多名寂。侍者弟子名無垢称。」（ただし「鼓音王経云。」に述べられた事柄は〈悲華経〉の所説である。）
・唐迦才撰『浄土論』（大正 No. 1963, p. 84c）
「問曰。已知西方具有三土。未知即今凡夫念仏願生得何土也。答曰。依如摂論。唯生化土。不見法報土也。就化土中有其二種。一是胎生。二是化生。胎生土者。復有二種。一狐疑人。生極楽辺城七宝宮殿中。五百歳不見仏。名之為胎。此是〈無量寿経説〉　二者実有父母。名之為胎。如鼓音声王陀羅尼経説。此即阿弥陀仏亦有父母等。経云。城名清泰。十千由旬。於中充満刹利之種。父名月上転輪聖王。母名殊勝妙顔。子名月明。奉事弟子。名無垢称。智慧弟子名攬光。神足弟子名主化。魔名無勝。提婆達多名寂也〈此自別化一切衆生。非今念仏往生者也。此即処一。見有異也〉」
・新羅太賢作『大乗起信論内義略探記』（大正 No. 1849, p. 420c）
「故鼓音王経云。阿弥陀仏。父名月上。母名殊勝妙顔。子名月明。奉事弟子名無垢称。魔王名無勝。調達名寂。無量寿経論云。女人及根欠。二乗種不生。彼土既報土。無実女。仏菩薩化為母等。化分段故。然非先在天処。下方成仏。故与樹下身全別。又他受用。亦滅度故。」
・唐窺基撰『大乗法苑義林章』（大正 No. 1861, p 349a「破魔羅義林」）
「鼓音王経云。阿弥陀仏父名月上。母名殊勝妙顔。魔王名無勝。調達名寂。」
・同上（大正 No. 1861, p 364c「三身義林」）
「鼓音王経説。阿弥陀仏。父名月上。母名殊勝妙顔。子名月明。奉事弟子名無垢称。魔王名無勝。調達名寂。無量寿論云。女人及根欠。二乗種不生。既是報土無実女人。仏及菩薩化為母等。化分段身故此相。」
・同上（大正 No. 1861, p 371c「仏土章」）
「鼓音王経云。阿弥陀仏父名月上。母名殊勝妙顔。有子。有魔。亦有調達。亦有王城。若非化身寧有此事。」

34)　漢訳対応箇所は「もし［人がいたとして］かの仏の名号を受持し（若有受持彼仏名号）」である。冒頭の称名念仏説から一転して，観想念仏の要素が含まれることになる。これについて例えば，源信『往生要集』（『浄土宗全書』15, p. 129）は「念仏證拠」の第十番に，念仏（観想）が往生業となる当経当該箇所を挙げる。すなわち以下の通りである。
「十往生論以観念彼仏依正功徳，為往生業。已上　此中観経下下品，阿弥陀経，鼓音声経但以念名号，為往生業。何況観念相好功徳。」

はすぐさま大いに喜びを生じる。この因縁によって，願い通りにすぐさま往生できる。」

E. 東北 No. 676, Ba. 221b4–7, 大谷 No. 363, Ba. 255a3–7

比丘たちよ，『無死鼓音声王』（*'Chi med rnga sgra'i rgyal po*）といわれるその陀羅尼は何かといえば[38]

ta dya thā / sha ba le / a ba le / sa ma dza le / ni rde she (P. ni re sha) / nir dzā te / ni ru kte (P. ni ru ga te) / nir mu khe (P. ni ra mu khe) / dzwa la pa ri tstshe da ni (P. dzwa la ba ra tshe da ni) / su kha ba ti ni rde she (P. su kha ba te nir te she) / a mṛ te (P. a mi te) / ā yur ga rbha nir hā ni (P. a yur ga rbha nir hā ni) / a mṛ te (P. a mi ti) / ā yuḥ pra sā dha ne (P. a yur pra sā dha ni) / nir bu ddhi ā kā sha ni rde she (P. a ka ṣha nir de she) / ā kā sha ni rdzā te (P. a ka sha nir rdza te) / ā kā sha nir ku sha le (P. a ka sha nir ku sha le) / ā kā sha nir da rsha ne (P. a ka sha nir de sha ni) / ā kā sha a dhi ṣhṭhā ne (P. a ka shā a dhi ṣhtha ne) / su kha ba ti a dhi ṣhṭhā ne (P. su kha ba te a dhi ṣhṭhi ne) / rū pa ni rde she (P. ru pa ni de she) / tsa twā ri dha rma pra sā dha ne (P. tswa twa ri dha rma

35) 漢訳対応箇所は「その心を堅固にし，憶念し，～（中略）～十日の内に必ず阿弥陀仏を見ることができる。並びに十方世界の如来，およびその住所を見る。（堅固其心，憶念不忘，十日十夜，除捨散乱，精勤修集，念仏三昧，知彼如来，常恒住於安楽世界，憶念相続，勿令断絶。受持読誦此鼓音声王大陀羅尼，十日十夜，六時専念，五体投地，礼敬彼仏，堅固正念，悉除散乱。若能令心念念不絶，十日之中，必得見彼阿弥陀仏。並見十方世界如来及所住処）」である。十日十夜の念仏説である。唐迦才撰『浄土論』（大正 No. 1963, p. 90a）には十日念仏説の根拠に当経を『平等覚経』と並べて挙げる。すなわち以下の通りである。
「三者須専念阿弥陀仏名号。須別荘厳一道場。焼香散花幡燈具足。請一阿弥陀仏。安道場内。像面向東。人面向西。或七日〈小阿弥陀経中明七日〉 或十日〈鼓音声王経，清浄平等覚経明十日〉」
ちなみに『平等覚経』，すなわち伝支婁迦讖訳の対応箇所は以下の通りである。「当一心念欲生無量清浄仏国。昼夜十日不断絶者寿終則往生無量清浄仏国」（大正 No. 361, p. 292c），「至要当斉戒一心清浄昼夜常念欲往生無量清浄仏国。十日十夜不断絶。我皆慈愍之。悉令生無量清浄仏国」（大正 No. 361, p. 293a）
源信『往生要集』（『浄土宗全書』15, p. 110）にも「言所十日行者出鼓音声王経，清浄平等覚経」と同趣意を出す。さらに *ibid.*, p. 123 には十日十夜の六時念仏によって得られる「将来勝利」（未来に得る利益）にちなんで当経の十日念仏説を挙げる。その他，以下の用例もある。
・元普度編『廬山蓮宗宝鑑』（大正 No. 1973, p. 329a「天竺慈雲式懺主往生正信偈」より）
「鼓音王経如是説　十日十夜持斎戒　縣繒旛蓋然香灯　繫念不断得往生」
・宋遵式撰『往生浄土懺願儀』（大正 No. 1984, p. 491b）
「第三明正修意　　大集明七七日。鼓音王及大弥陀経十日十夜。十六観経及小弥陀経。明七日七夜。取此三等為期。決不可減。言正修意者。天親論曰。～」

36) Tib. thams cad kyang は「すべてまとめたもの」といった意味である。Skt. api（Tib. kyang）の扱いについて例えば Monier Williams [1956] p. 55a には「Api は数詞に総数概念を添える」と説明されている。この場合の Tib. kyang は原語の名残りである。蔵訳の「仏世尊一切を見るであろう（sangs rgyas bcom ldan 'das thams cad kyang mthong bar 'gyur ro / /）」に対して，漢訳には対応が見られず，蔵訳がインド原典から翻訳されたことを推測させる。

37）以上の所説は〈無量寿経〉梵本27章，並びに〈阿弥陀経〉梵本10章，〈般舟三昧経〉蔵訳3章を代表とする数典籍の内容を綜合し，そこに陀羅尼読誦を往生因として新たに付加した段である。以下に梵本と蔵訳を中心にしたそれぞれの当該箇所を以下に示し，参考としたい。

a.〈無量寿経〉梵本の対応箇所（Ashikaga [1965] p. 42, l.9）

「さてアーナンダよ，どんな衆生たちであってもかの如来を何度も容姿の面から思念し，多く無量の善根を植え，覚りに心を廻して，そしてかの世界に生まれるために将来誓願するとしよう。かの無量光如来応供正等覚者は彼らの臨終が差し迫った時，無数の比丘のサンガによって囲繞され，崇敬され，［彼等の面前に］立つでしょう。そこで彼らはかの世尊を見て，澄浄な心があり，他ならぬその極楽世界に生まれる。アーナンダよ，善男子，善女人で欲する者がいる。【私は他ならぬ現世においてかの無量光如来を一体どうすれば見れるであろうか】と。その者によって無上正等覚に心を発して，増上意楽（adhyāśaya-patitayā saṃtatyā，lhag pa'i bsam pa'i rgyud kyis）［を持った者］の［心身の］相続によって，かの仏国土に心を繋げ，生まれるために諸善根が廻向されるべきである。」

蔵訳と漢訳の対応箇所は以下の通りである。ちなみに漢訳（伝支謙訳，伝支婁迦讖訳，伝康僧鎧訳）でいうところの三輩段上輩にあたる。梵本，蔵訳，法賢訳には三輩の区別は見られない。

［蔵訳］『浄土宗全書』23，p. 286，［漢訳］伝支謙訳（大正 No. 362, p. 310a），伝支婁迦讖訳（大正 No. 361, p. 291c），伝康僧鎧訳（大正 No. 360, p. 272b），菩提流支訳（大正 No. 310–5, pp. 97c–98a），法賢訳（大正 No. 363, p. 323b）

b.〈阿弥陀経〉梵本の対応箇所（藤田［2001］p. 82, l.28）

「シャーリプトラよ，善男子あるいは善女人どんな人であろうとも，かの世尊無量寿如来の名号を聞き，そして聞いて思念するとします。一夜，あるいは二夜，あるいは三夜，あるいは四夜，あるいは五夜，あるいは六夜，あるいは七夜にわたり散乱しない心の者が思念するとします。かの善男子あるいは善女人が死に至る時，声聞のサンガに囲繞され，菩薩の集いに恭敬されたかの無量寿如来は，その死に至りつつある者の前に立つであろう。そしてかの者は心が転倒せず死ぬであろう。その者が死んでからその同じ無量寿如来の仏国土である極楽世界に生まれであろう。」

蔵訳と漢訳の対応箇所は以下の通りである。［蔵訳］（『浄土宗全書』23，p. 348），［漢訳］姚秦鳩摩羅什訳『仏説阿弥陀経』（大正 No. 366, p. 347b），唐玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』（大正 No. 367, p. 350a）

c.〈般舟三昧経〉蔵訳の対応箇所（Paul M. Harrison [1978] p. 27, l.12）

「そのようにバドラパーラよ，菩薩の在家者であっても，出家者であっても，静かな場所に独り赴いて，坐って，如来・応供・正等覚・無量寿仏を，今まで聞いた通りの姿によって作意して，戒蘊に過失なく，念が散乱することなく，一日一夜，あるいは二［日一夜］，あるいは三［日一夜］，あるいは四［日一夜］，あるいは五［日一夜］，あるいは六［日一夜］，あるいは七日七夜にわたって作意すべきである。その者がもし七日七夜にわたって心を散乱せず，無量寿如来を作意すれば，彼は七日七夜を満たし終わってから，世尊・如来・無量寿を見る。彼がもし日中かの世尊を見なければ，彼が睡眠中の夢に，かの世尊・如来・無量寿の御顔が現わされる。」

当該箇所の梵本は未発見。漢訳の対応箇所は以下の通りである。［漢訳］後漢月氏三蔵支婁迦讖訳『般舟三昧経』（大正 No. 418, pp. 905a），後漢月氏三蔵支婁迦讖訳『仏説般舟三昧経』（大正 No. 417, pp. 899a），失訳『拔陂菩薩経』（大正 No. 419, pp. 922a），隋天竺三蔵闍那崛多訳『大方等大集経賢護分』（大正 No. 416, pp. 875c）

38）ここでは試みにデルゲ版（東北 No. 676）をもとに北京版（大谷 No. 363）との相違を確認した。しかし例えば語尾末尾の違い，長音の有無，母音のあて方など問題点が多々存在し，音写蔵語から正確な還梵は困難である。また蔵訳冒頭には「sha ba le / a ba le /」とあり特に前半「sha ba le /」の意味は不明であるが，対応する漢訳「婆離（二）　阿婆離（三）」から「ba le / a ba le /（力ある者よ，力なき者よ）」とかろうじて理解できるごとく，原語の想定すらままならぬ箇所もある。こうした問題のため，現代語訳は見合わせた。しかしこの陀羅尼が虚空や鼓音の例えを用いて，無死甘露の法やそうした法を説く仏の性格を主題とし，極楽や寿命の母胎に言及するものであることは明らかである。

pra sā da ni) / tsa twā ri ā rya sa tya pra sā dha ne (P. tswa twa ri ā rya sa tya pra sā dha ni) / tsa twā ri mā rga bha ba na pra sā dha ne (tswa twa ri mā rga bha na pra sā da na) / ba la bī rya pra sā dha ne (P. ba la bi rya pra sā dha ni) / dha rmā tstshe da ne (P. dha rmā tshe dha ni) / ku sha le / ku sha la ni rde she (P. ku sha la ni de sha) / ku sha la pra ti ṣhṭhā ne (P. ku sha la pra ti ṣhṭha ni) / bu ddha ku sha le / bi shu ddha pra bha sa dha rma ka ra ṇe (P. bi shu ddha pra bha / sa dha rma ka ra ni) / nir dza te (P. nir dza ti) / nir bud dhe / bi ma le / bi ra dze / rā dza se (P. ra dzā sa) / ra sā gre (P. ra sa gre) / ra sā gra ba la (P. ra sā gra ba le) / ra sā gra / a dhi ṣhṭhi te / ku le pra ti ku le / bi ku le / da nte su da nta ci tte (P. dhan to su dhan ta tsid te) / su pra shā nta tsi tte (P. su pra sha na ta tsid te) / su pra ti ṣhṭhi te (P. su pra ti ṣhṭha te) / su le su mu khī / dha rme tsa dha rmeḥ / ba le tsa ba le / a nu sha a ba le / bud dha ā kā sha gu ṇe / bud dha / ā kā sha nir gu ṇe (P. bud dha a kā shā gu ṇa bud dha / a kā shā nir gu ṇi) / a mṛ ta dun du bhiḥ swa re swā hā /

E. 大正 No. 370, pp. 352c11-353a7

仏は比丘たちにお告げになった。「どうして名前が『鼓音声王大陀羅尼』というのか，私はいま説こう。あなた方は良く聞きなさい。」と。「はいわかりました。教えを受けます。」と。そのとき世尊は［次のような］陀羅尼をお説きになった。

「多狄他（一）　婆離（二）　阿婆離（三）　娑摩婆羅（四）　尼地奢（五）　昵闍多禰（六）　昵茂邸（七）　昵茂企（八）　闍羅婆羅車駄禰（九）　宿佉波啼昵地奢（十）　阿弥多由婆離（十一）　阿弥多蛇伽婆昵呵隷（十二）　阿弥多蛇波羅娑陀禰（十三）　涅浮提（十四）　阿迦舎昵浮陀（十五）　阿迦舎昵提奢（十六）　阿迦舎昵闍啼（十七）　阿迦舎久舎離（十八）　阿迦舎達奢尼（十九）　阿迦舎提呰禰（二十）　留波昵提奢（二十一）　嚕跛坦泥勢（二十二）　遮埵唎達摩波羅娑阿禰（二十三）　遮唾唎阿利蛇娑帝蛇波羅娑陀禰（二十四）　遮埵唎末伽婆那波羅娑陀禰（二十五）　婆羅毘梨耶波羅娑陀禰（二十六）　達摩呻他禰（二十七）　久舎離（二十八）　久舎羅昵提奢（二十九）　久奢羅波羅啼呰禰（三十）　仏陀久奢離（三十一）　毘仏陀波羅波斯（三十二）　達摩迦羅禰（三十三）　昵専啼（三十四）　昵浮提（三十五）　毘摩離（三十六）　毘羅闍（三十七）　羅闍（三十八）　羅斯（三十九）　羅娑岐（四十）　羅娑伽羅婆離（四十一）　羅娑伽羅阿地呰禰（四十二）　久舎離（四十三）　波羅啼久舎離（四十四）　毘久舎離（四十五）　呰啼（四十六）　修陀多至啼（四十七）　修波羅舎多至啼（四十八）　修波羅啼痴啼（四十九）　修離（五十）　修目企（五十一）　達咩

（五十二）　達達啼（五十三）　離婆（五十四）　遮婆離（五十五）　阿瓮舎婆離（五十六）　仏陀迦舎昵裘禰仏陀迦舎裘禰（五十七）　娑婆呵（五十八）」と。

F.　東北 No. 676, Ba. 221b7-222a5,　大谷 No. 363, Ba. 255a7-b5

比丘たちよ，浄信する良家の息子（D. 222a1）または良家の娘［の或る者にして］，『無死鼓音声王』（*'Chi med rnga sgra'i rgyal po*）といわれる陀羅尼を，示したその通りに諷誦する者は，浄らかな衣を着て，清浄で無垢な土地において，無量寿如来に対して華と香によって供養すべきである。菩提座の蓮華の住処と，菩提樹の円満をもまた作意すべきである。それに対してまた願望を生じさせて，願望と浄信をなしたならば，かの無量寿如来の仏国土に生まれるであろう。比丘たちよ，無量寿如来の樹木の王，［すなわち］「宝蓮華の光明（Rin po che'i padma rnam par snang ba）」といわれるかの樹木は華と果実が円満である[39]。

蓮華座においては，清浄であり明るく賢れており具吉祥光明（bkra ba'i 'od zer can）といわれたくさんの宝石が取り巻いた，その所に無量寿如来が住しておられる。右に観自在菩薩，左に大勢至菩薩［がおり］[40]，無数の菩薩の集いが取り巻いている。

浄信の子息あるいは子女誰であれ，信解（mos pa）と浄信（dad pa）と尊敬（gus

39）　菩提樹の固有名詞などは〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉には見られない。この記述は，ニンマ派の学僧ドォトゥプチェン3世ジクメー・テンペーニマ（rDo grub chen gsum pa 'Jigs med bstan pa'i nyi ma, 1865–1926）の著『極楽国土に関する話　―善の収穫物を増長させる大きな夏雲の［雷が］鳴り響く音声―』（*bDe ba can gyi zhing las brtsams pa'i gtam　—dGe pa'i lo thog spel byed dbyar skyes sprin chen glal ba'i sgra dbyangs—*）に引用されている（cf. 和訳→梶濱［2002］p. 639）

40）　漢訳対応箇所は「阿弥陀仏は大宝花［の座］に結加趺坐しておられる。二［人の］菩薩がいる。一［人めは］観世音という。二［人めは］大勢至という。この二菩薩は［阿弥陀仏の］左右につき従い立っている（阿弥陀仏，於大宝花，結跏趺坐。有二菩薩。一名観世音，二名大勢至。是二菩薩侍立左右）」である。ここには阿弥陀仏を中心に右脇時に観自在，左脇時に大勢至を配したいわゆる「阿弥陀三尊」が説かれる。〈無量寿経〉諸本は何れも観自在菩薩，大勢至菩薩を阿弥陀仏の眷属として挙げるがそれ以上の詳細な記述はない（※1）。ところで米国ヴィラノール博物館には右脇侍を失った阿弥陀仏，観音菩薩の二尊のガンダーラ仏（三世紀以後）が所蔵されている。ここの右脇侍は恐らくは勢至菩薩と考えられるが，ガンダーラを含むインドにおいては宝瓶を載せた勢至菩薩の図像は確認できないため，阿弥陀三尊か否かは正確には不明とされる。またこの三尊（二尊）を除いてインドでは阿弥陀三尊は確認されていないそうである（※2）。その意味において当経当該箇所はインド圏における阿弥陀三尊形式に触れる点が注目される。ちなみに成立地がインド説と中央アジア説と分かれる，劉宋畺良耶舎訳『観無量寿経』（大正 No. 365, p. 342c）には「無量寿仏住立空中。観世音大勢至，是二大士侍立左右」と当経漢訳と同様の理解を示す。

※1.［梵本］Ashikaga [1965] p. 49, l.9,［蔵訳］『浄土宗全書』23, p. 296,［漢訳］伝支謙訳（大正 No. 362, p. 308b），伝支婁迦讖訳（大正 No. 361, p. 290a），伝康僧鎧訳（大正 No. 360, p. 272b），菩提流支訳（大正 No. 310–5, p. 97c），法賢訳（大正 No. 363, p. 323a–b）

※2. cf. 宮治［1999］pp. 124–125

pa)[41] が多い[42] 彼［ら］は，そこ（極楽世界）に生まれるであろう。［すなわち］黄金の大地にある七宝の大蓮華に化生するであろう[43]。

F. 大正 No. 370, p. 353a8-23

これが『阿弥陀鼓音声王大陀羅尼』である。もし比丘，比丘尼，清信士，清信女がおり，常にまさに心から［『阿弥陀鼓音声王大陀羅尼』を］受持し，読誦し，説かれた通りに修行し，この陀羅尼を行い，まさに閑静な場所におちつき，自分の身体を洗浴し，新しい浄衣を身につけ，白素を食し，酒と肉そして五辛を口にせず，常に梵行を行い，よい香と花によって阿弥陀如来そして菩提座，偉大な菩薩衆を供養し，常にまさにこのように心を集中して思いをかけ，発願して極楽世界に生まれることを求め，努力して怠らなければ，その願い通りに必ずかの仏の世界に往生できる。そのとき阿弥陀仏は大衆と共に宝でできた蓮華［座］に坐っておられる。その［極楽］国土には灌木と林，花，果実が鮮やかに広がっており，入り混じり飾られている。また一等級の樹木（樹木王）がある。そよぐ風は香しく，和らぎ雅な音を出し，もっぱらこの上ない不可思議な法を説いている。また素晴らしい香（妙香）があり，光明と名づけられている。いくつかの塗香も宝の香（宝香）である。阿弥陀仏は大宝花［の座］に結加趺坐しておられる。二［人の］菩薩がいる。一［人めは］観世音という。二［人めは］大勢至という。この二菩薩は［阿弥陀仏の］左右につき従い立っている。無数の菩薩がこの集会においてとりまき囲遶している。もし［こうした様子を］深く

41）「信」を三種類に分ける説明はインド的なものであり，例えば〈唯識三十頌〉vs. 10d–11c にも見られる。本経のように「gus pa（尊敬）」を含んだ用例としては，ハリバドラ（Haribhadra）著『宝徳蔵般若経の難語釈』（Skt. *Bhagavadratnaguṇasañcayagāthā*）の蔵訳（［デルゲ版］東北 No. 3792, Sher phyin, Ja 5a2-3）に，原文の I2a 句の「dga' dang gus dang dad pa'i mchog（喜と敬と信の最上）」を説明して，「喜は願楽すること（mngon par 'dod pa），敬は信頼すること（mngon par yid ches pa），信は敬の差別である。」という。

42）漢訳対応箇所は「もし［こうした様子を］深く信じ，疑わなければ，（若能深信，無狐疑者）」である。源信『往生要集』（『浄土宗全書』15, p. 89）では『観無量寿経』が説く至誠心，深心，廻向発願心の中から，深心を説明する根拠の一つとして当経当該箇所が挙げられる。すなわち以下の通りである。
「問。既知修行総有四相。其修行時用心云何。答。観経云，若有衆生願生彼国者発三種心，即便往生。一至誠心，二深心，三廻向発願心。（中略）鼓音声王経云，若能深心無狐疑者必得往生。」

43）漢訳対応箇所は「七宝できた蓮花が（／に）自ずと現れ出る（七宝蓮花，自然踊出）」である。〈無量寿経〉の対応箇所は以下の通りである。
［梵本］Ashikaga [1965] p. 58, l.2,［蔵訳］『浄土宗全書』23, p. 310,［漢訳］伝康僧鎧訳（大正 No. 360, p. 278a–b），菩提流支訳（大正 No. 310–5, p. 100a），法賢訳（大正 No. 363, p. 325b）
この中で最もよく対応するのは伝康僧鎧訳である。すなわち以下の通りである。「（若有衆生，明信仏智乃至勝智，作諸功徳信心廻向。此諸衆生於七宝華中自然化生加（跏）趺而坐）」

信じ，疑わなければ，必ず阿弥陀［仏の］国［土］に往生できる。その［国土の大］地は黄金であり，七宝できた蓮花が（／に）自ずと現れ出る。

G. 東北 No. 676, Ba. 222a5-7, 大谷 No. 363, Ba. 255b5-7

比丘たちよ，比丘，あるいは比丘尼，あるいは優婆塞，あるいは優婆夷それぞれが世尊無量寿如来の名号を浄らかに受持するならば，その者には火の恐怖は生じない。水の恐怖は生じない。毒の恐怖は生じない。武器の恐怖は生じない。ヤシャの恐怖は生じない。ヤクシャの恐怖は生じない。［ただし］以前の業の果報がある者は誰であれ除外される。」

G. 大正 No. 370, p. 353a23-26

もし四衆がかの仏の名号を受持し読誦したならば，ないし水，火，毒薬，刀杖の恐怖までもがなくなり，さらにヤクシャ等の恐怖もない。過去の重罪と業障〔のある者〕を除いて，七回の生存のうちに必ず願いは成し遂げられる。」

H. 東北 No. 676, Ba. 222a7, 大谷 No. 363, Ba. 255b7-8

世尊がこのように宣べられてから，彼ら比丘たちと，皆をふくめた眷属彼らと，神と，人と，阿修羅と，ガンダルバを含めた世間の者は歓喜して，世尊による御言葉を讃嘆した。

H. 大正 No. 370, p. 353a26-b1

仏がこの『阿弥陀鼓音声王陀羅尼』を説かれた時，無量の衆生は誰もが発願し，かの極楽世界に生まれることを願い求めた。その時に世尊は讃歎された。「すばらしい，すばらしい。お前の願う通り，必ずそこに生まれることができる」と。

仏が説き終わったのを聞いて，天龍八部［衆］は踊り上がらんほどに歓喜し，敬礼し，［この経典の教えを］大切に実践した。

I. 東北 No. 676, Ba. 222a7-b1, 大谷 No. 363, Ba. 255b8-256a1

『聖なる（D. 222b1）無量寿智の心呪』（*'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po*）といわれる陀羅尼が終わった。インドの親教師プンニャサンバヴァ（Puṇyasaṃbhava）と翻訳師パツァプ・ニマダク（Pa tshab Nyi ma grags）が翻訳した[44]。

I. 大正 No. 370, p. 353b1

阿弥陀鼓音声王陀羅尼経

［参考文献］

阿部泰郎

・編『真福寺善本叢刊』1，臨川書店，2005年

石田瑞麿

・『源信』（「日本思想大系」6），岩波書店，1970年

磯田熙文

・編『密教経典篇』（「梵語仏典の研究」4），平楽寺書店，1989年

氏家覚勝

・『陀羅尼思想の研究』，東方出版，1987年

落合俊典

・「『呪土経』と失訳陀羅尼経典について」（『佐藤良純教授古稀記念論文集　インド文化と仏教思想の基調と展開』，山喜房仏書林，2003年）

小野玄妙

・編『仏書解説大辞典（縮刷版）』，大東出版社，1999年

小野田俊蔵

・「チベット撰述の浄土教仏典」（『佛教大学大学院研究紀要』7，1979年）

・「『阿弥陀鼓音声陀羅尼経』に基づく西蔵曼荼羅」（『日本仏教学会年報』52，1987年）

・「西蔵仏教の浄土教理解」（『現代における法然浄土教思想信仰の解明』，浄土宗総合研究所，2000年）

44）共訳者の一人であるプンニャサンバヴァについては不明である。例えば北京版西蔵大蔵経では当経にのみ名前を出すごとく彼に関する記録伝記類は極端に少ない。もう一方のパツァプ・ニマダクについては『青冊』（*Deb ther sngon po*）が詳しい（※1）。彼は12世紀あたりの人物であり，ペンユル（'Phan yul）のパツァプに生まれ，青年時にインドのカシュミールに赴き多くのパンディタから教えを聴聞する。二十三年間学業を積み，その後チベットに戻り要請に応じて多くの経論を翻訳した。その中にはアビダルマコーシャの註釈 *Abhidharmakoṣaṭīkālakṣanānusāriṇī*（［デルゲ版］東北 No. 4093,［北京版］大谷 No. 5594）や中観派の論書，特に中観帰謬論証派の開祖チャンドラキールティの主著 *Prasannapadā*（［デルゲ版］東北 No. 3860,［北京版］大谷 No. 5260），*Madhyamakāvatāra*（［デルゲ版］東北 No. 3861,［北京版］大谷 No. 5262）等の重要な典籍が多数含まれている。特にこれら中観論書の紹介により，チベットには帰謬論証派の学流が広く行われるようになった。彼は原文に忠実に訳す訳風であり，先行する翻訳師リンチェンサンポを高く評価しつつも，より正確な訳を期すため改訂訳を出したことでも知られている。さらに中観の祖師の著とされる後期密教経典（*Guhyasamāja*）の註釈文献を翻訳し指導も行った。彼には「パツァプ四子（sPa tshab bu bzhi）」と呼ばれる著明な弟子が育った。ツァンパ・サルブゥ（gTsang pa Sar sbos），マチャ・チャンチュプイェシェー（rMa bya Byang chub ye shes），ガル・ユンテンダクパ（Ngar Yon tan grags pa），シャン・タンサクパ・イェシェー（Zhang Thang sag pa Ye shes）である。

※1. cf. G. N. Roerich [1949] p. 272, pp. 341–343

香川孝雄

・「弥陀三尊思想の形成」(『善導大師千三百年遠忌記念　善導教学の研究』, 東洋文化出版, 1980 年)

・『無量寿経の諸本対照研究』, 永田文昌堂, 1984 年

・『浄土教の成立史的研究』, 山喜房仏書林, 1993 年

梶濱亮俊

・『チベットの浄土教思想の研究』, 永田文昌堂, 2002 年

勝崎裕彦

・編著『大乗経典解説事典』, 北辰堂, 1997 年

金子寛哉

・「『群疑論』における仏身仏土の一側面　―『鼓音声陀羅尼経』の説を中心に―」(『大正大学研究論叢』8, 2000 年)

小峰弥彦

・編著『大乗経典解説事典』, 北辰堂, 1997 年

下田正弘

・『蔵文和訳『大乗涅槃経』(1)』, 山喜房仏書林, 1993 年

・編著『大乗経典解説事典』, 北辰堂, 1997 年

・『涅槃経の研究　―大乗経典の研究方法試論―』, 春秋社, 2000 年

浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局

・『浄土宗全書』1, 山喜房仏書林, 1970 年

・『浄土宗全書』15, 山喜房仏書林, 1971 年

・『浄土宗全書』23, 山喜房仏書林, 1972 年

白土顕成

・「Jitāri, 一人と思想―」(『木村武夫教授古稀記念　僧伝の研究』, 永田文昌堂, 1981 年)

髙橋弘次

・「善導大師の仏身観」(『小沢教授頌寿記念　善導大師の思想とその影響』, 大東出版社, 1977 年)

・「慧遠と善導の仏身論　―その相違点をめぐって―」(『善導大師千三百年遠忌記念　善導教学の研究』, 東洋文化出版, 1980 年)

田中公明

・『チベット密教』, 春秋社, 1996 年

・『両界曼荼羅の誕生』, 春秋社, 2004 年

塚本啓祥

・編『密教経典篇』(「梵語仏典の研究」4), 平楽寺書店, 1989 年

坪井俊映

・『浄土教汎論』, 隆文館, 1980 年

ツルティム・ケサン

・『ツォンカパ　菩提道次第大論の研究』, 文栄堂, 2005 年

中御門敬教

・「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態　―阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践―」（『佛教大学総合研究所紀要』10，2003年）

・「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　―「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して―」（『佛教大学総合研究所紀要』11，2004年）

中村元

・編『仏典II』（「世界古典文学全集」7），筑摩書房，1972年

・『ゴータマ・ブッタ』1（「中村元選集［決定版］第11巻　原始仏教1」），春秋社，1992年

名畑応順

・『迦才浄土論の研究』論攷篇，法蔵館，1955年

日本仏教人名辞典編纂委員会

・編『日本仏教人名辞典』，法蔵館，1992年

藤田宏達

・『原始浄土思想の研究』，岩波書店，1970年

・『梵文和訳　無量寿経・阿弥陀経』，法蔵館，1975年

・『阿弥陀経講究』，真宗大谷派宗務所出版部，2001年

藤仲孝司

・「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態　―阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践―」（『佛教大学総合研究所紀要』10，2003年）

・「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　―「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して―」（『佛教大学総合研究所紀要』11，2004年）

・『ツォンカパ　菩提道次第大論の研究』，文栄堂，2005年

仏書刊行会編

・『大日本仏教全書』（「阿娑縛抄」2），1912年

松永有慶

・編『密教経典篇』（「梵語仏典の研究」4），平楽寺書店，1989年

松本照敬

・「「阿弥陀如来根本陀羅尼」考」（『成田山仏教研究所紀要』29，2006年）

丸山孝雄

・編『仏書解説大辞典（縮刷版）』，大東出版社，1999年

宮治昭

・『仏教美術のイコノロジー』，吉川弘文館，1999年

山崎誠

・編『真福寺善本叢刊』1（臨川書店，2005年）

頼富本宏

・『密教仏の研究』，法蔵館，1990年

渡辺章悟

・編著『大乗経典解説事典』，北辰堂，1997年

渡辺隆生

・『安楽集講読』，永田文昌堂，1999 年

・『安楽集要述』，永田文昌堂，2002 年

Atuuji Ashikaga

・*SUKHĀVATĪVYŪHA*, Kyoto, 1965

G. N. Roerich

・*The Blue Annals* Part 1, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949

Monier Williams

・*A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford, 1956

Paul M. Harrison

・*The Tibetan Text of the Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-sūtra*, Tokyo, 1978

（付記：本稿は藤仲孝司氏との共同研究の成果です。また本庄良文氏に数々の御教示を頂きました。ここに謝意を表します。）